



# 元気っ子

No 297 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

新緑の若葉がとても美しい季節になりました。こうしたことを子どもと一緒に思いを共有することも子どもの育ちにとってとても大切なことだと思います。「この緑のことを新緑と言うのか」だとか、「この時期に木々の若葉は芽を出すのか」といった言語、表現、季節感などといった育ちに繋がっていくからです。

先日、「保育所保育指針」から保育実践を考えるというお話を聞かせて頂きました。「保育所保育指針」は我々、保育者が保育を考えるうえでの原点になるもので、厚生労働省から時代の変遷と共に約10年ごとに改定、発行されているものです。私もこの指針は常に携行し、常々読み込むようにしています。

その指針の「序章」の「改定の背景及び経緯」に以下のように書かれています。

「・・・他方、様々な研究成果蓄積によって、乳幼児期における自尊心や自己制御、忍耐力といった主に社会情動的側面における育ちが、大人になってからの生活に影響を及ぼすことが明らかになってきた。これらの知見に基づき、保育所において保育士等や他の子どもたちと関わる経験やそのあり方は、乳幼児期以降も長期にわたって、様々な面で個人ひいては社会全体に大きな影響を与えるものとして、我が国はもとより国際的にもその重要性に対する認識が高まっている。」

とあります。社会情動的側面における育ちとは最近では「学びに向かう力」と訳されることが多いのですが、上記の文章を要約すると、「最近の研究では、乳幼児期に獲得する学びに向かう力（資質）は大人になってからの生活に大きな影響を与えるものであると、日本だけでなく国際的にも認められてきた」という内容です。そう考えると、保育において、例えば、きちんと最後まで座って人の話を聞くという資質が備わっていくことも、そのプロセスがとても大切だということが見えてきます。「きちんと座って聞いてないとダメでしょ！」と何度も言われて聞けるようになることと、「静かに座って聞いておかないと自分がこの先にどうしたらいいか分からなくなるから聞く」では、できるようになった子どもの姿は同じように見えますが、そのプロセスは大きく違っています。前者は「そうしないと怒られるから」であり、後者は「自分が不利になるから」という違いがあるのです。これが大人になってからの生活に影響を及ぼす部分だということです。

ながさわ保育園で様々な保育実践を行っていく中で、大切にしているのはこのプロセスの部分です。心がどう育つか、そのためにはどういう環境を設定して発達を促すのか、子どもの主体性を尊重しながら、様々な場面で選択を促したりすることは、子どもたちがこれからの社会をより良く、幸せに生きていくために備えておくべき資質を獲得するためのプロセスを重視した保育を展開していくためです。

世界が向かおうとしている教育の方向性を常に意識しながら、職員とも情報の共有を図り、子どもたちと向き合っていこうと思います。

